

地域の国際化に向けた取組み

岩手県海外情報発信専門員
兼I-LC国際連携専門員

和山 アマンド



奥州市国際化推進員

トマス・アンナ



I-LCは世界の研究者が協力し、世界に一つだけ建設する国際プロジェクトで、岩手県と宮城県にまたがる北上山地が事実上、世界唯一の建設候補地になっている。

I-LCの実現により、科学の発展や技術の革新はもちろんのこと、研究施設に従事する外国人研究者及びその家族が約3000人滞在し、

国際学術研究都市の形成が見込まれている。しかし、これはI-LCの研究所が立地して自然にできるものではない。関係機関や地域が努力し

地域の国際化を進めていく必要がある、海外の文化など理解を深めることが重要である。

I-LCの実現により、海外の研究者らは岩手・日本の文化に馴染み、地域の住民は普段の生活の中で素粒子物理学や世界の文化に触れ合うことになり、I-LCを契機として海外と日本、「相互の理解」を深めていく必要がある。

本稿では、県の海外情報発信専門員と奥州市の国際化推進員の二人が、研究者と地域の相互の融和を図るため、受入環境整備や地域の国際化などI-LC実現へ向けた取組、海外の研究者への情報発信などを紹介したい。

外国人研究者等に向けた取組

海外の研究者が最も関心があるのは、日本政

府からのI-LC誘致可否の判断である。海外の研究者からは、「日本から具体的な動きがないと、我々は自国での予算確保などが難しい」という声もある。

海外の研究者は、研究や予算など目の前の課題に注力しており、I-LCが実現して初めて、「北上サイトでの暮らし」を考える研究者も少なくないと考えている。研究者から見れば、「岩

手」「東北」の言葉を聞いたことがなく、日本すら分からないことが多いと思われ、認知度は高いとは言えない。今後は、岩手・東北がどのような地域か、自然、食、文化などの魅力、地元におけるアウトリーチ活動など海外への発信が必要である。

県では、外国人研究者の受入へ向けた環境整備や海外への情報発信など様々な取組を実施しており、その一端を紹介したい。

1. 外国人研究者等の視察の受入れ

県では、外国人研究者等が北上サイトに対する理解を深め、国際設計チームが現地の設計等を推進するため、外国人研究者等の視察の受入を実施している。

平成25年10月、I-LCの国際推進組織・リニアコライダーコラボレーション(LCC)が

北上サイトを訪問し、リン・エバンステイレクターは、「今後は、北上山地に限って検討を進める」と明言。以降、沿岸港湾からの搬送ルートや建設候補地など定期的に視察を受け入れ、本県の自然豊かな景色や山・海の幸などの食も堪能いただいている。I L Cは沿岸部の港湾の活用など、東日本大震災からの復興にもつながり、東北復興の希望の象徴と理解いただいている。



I L Cが北上サイトを視察（平成27年1月）

平成27年4月には、ドイツのDESY（ドイツ電子シンクロトロン）やアメリカのSLAC（国立加速器研究所）など、世界の素粒子物理学研究所の広報担当者（世界7カ国9機関）が北上サイトを訪問した。

広報担当者は候補地の様子のほか、地元の方々との交流を通じて、岩手の文化を世界の研究者に伝えたいという気持ちが強く、お弁当やまちのI L Cポスターを撮影し、地元のI L Cの熱意に感心していた。また、行政関係者との意見交換会では、視察の感想や研究者のニーズなど幅広く議論した。

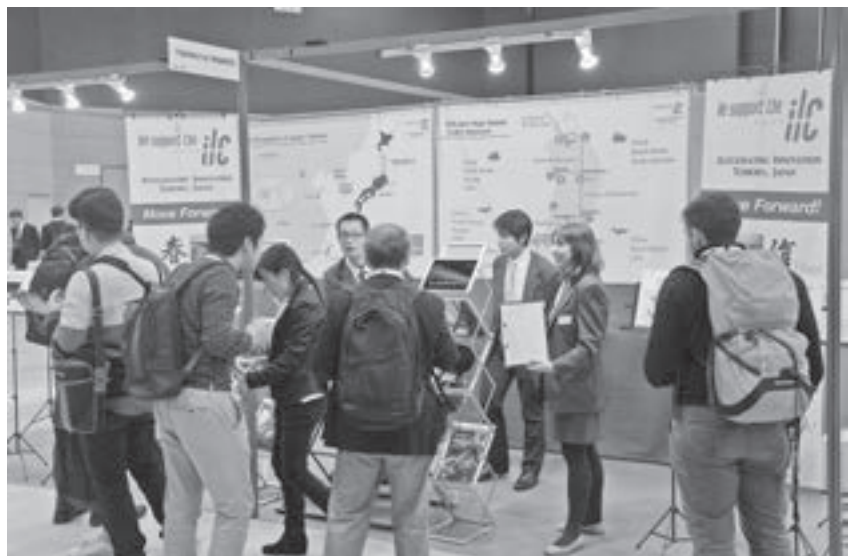
各国の広報担当者は、帰国後、それぞれの研究所で岩手での経験を発信し、本県がI L Cの建設候補地として注目を浴びた。

私たちは、全ての視察において通訳や案内を行い、岩手の顔として海外の方々とのネットワークを広げている。

2. 国際会議等での魅力発信

外国人研究者の視察の受入のほか、直接、海外の国際会議などに出向き、情報発信も行っている。

平成28年11月、フランス・ストラスブールで開かれた電気工学・電子工学技術学会（IEEE）



IEEEで岩手をPR（平成28年11月）

では、東北経済連合会のビジネスセンターと協働し、東北・岩手・I L Cを紹介するブースを出展し、建設候補地である北上サイトの観光、文化、食などの魅力を海外に強力に発信した。

学会の規模が大きく、参加する科学の分野が幅広いため、I L Cを知らない研究者が多く、世界の研究者にI L Cと東北の魅力をPRした。海外の研究者にアンケートも行い、約300人の研究者から回答いただいた。



L CWSで外国人研究者が餅つきに挑戦（平成28年12月）

平成28年12月に盛岡市で開催されたリニアコライダーワークショップ（LCWS）2016では、世界各国から約340人の研究者がこの岩手を訪れ、最新の研究成果の発表のほか、ILCのコスト削減につながるステージングについて議論を深めた。

本県は、関係機関と連携し、ILCの建設候補地の北上サイトの視察対応をはじめ、いわゆる「まるごとフェア」を学会会場で開催した。海外の研究者が出席ブースを回り、茶道や三陸の牡蠣を堪能するなど、日本文化や本県の魅力を肌で

感じていただいた。

研究者からは、「ILCの早期実現を願い、北上山地周辺に住んで研究をしたい」、「岩手の若者はILCに関して非常に関心が高く、感動した。我々も頑張りたい。」との声をいただいた。

3. 海外向け広報誌の定期発行

海外の研究者に対し、北上サイトの地域情報や地元のアウトリーチ活動を発信するため、ウェブを活用し、平成27年9月に「THE KITAKAMI TIMES」という英語版広報誌を創刊し、毎月、岩手の魅力やILCの取組を世界に発信している。

テーマは幅広く、これまで地域で開催されたILCセミナー、関係機関の視察、多文化共生へ向けた取組、地域の祭りなどの伝統文化、観光地など幅広く紹介している。加速器関連産業の話も盛り込み、海外の研究者に本県での暮らしをイメージしていただけるよう取り組んでいる。

THE KITAKAMI TIMESは、広域で連携し制作しており、奥州市・一関市・岩手県など、地元自治体のネットワーク強化にもつながっている。また、海外の研究者へ効果的なPRを行うため、取材・編集は私たち二人が担当している。最初から英語で原稿を作成することで、ネ



英語版ホームページの様子
出典：岩手県国際リニアコライダー推進協議会ホームページ

イティブならではのコンテンツづくりが可能である。THE KITAKAMI TIMESは、国としてインバウンドを進める中、外国人スタッフによる情報発信のモデルとして展開を目指している。これまで計34刊（平成29年7月現在）を発刊、全ての記事に日本語要約があるので、ぜひご覧いただきたい。

○岩手県国際リニアコライダー推進協議会ホームページ：THE KITAKAMI TIMES

<http://www.iwate-ilc.jp/>（日本語版）

<http://www.iwate-ilc.jp/eng/>（英語版）

地域住民等に向けた取組

1. I L Cキャラバンの取組

I L Cを契機として地域の国際化を推進するためには、地域の方々のI L Cへの理解や外国人に対するオープンマインドの醸成が必要である。元高エネルギー加速器研究機構長の岩手県立大学鈴木厚人学長は、「オール岩手、県民の参加・参画を促すことが地域の受入環境の整備につながる」と考えている。



I L Cキャラバンの様子（平成28年3月）

県では地元の参画を促すため、平成28年3月からI L Cキャラバンというセミナーを県内各地で開催している。セミナーでは、素粒子物理学などの専門的な話は最小限とし、I L Cと地域のかかわりに重きを置いている。I L Cを契機として地域をどう変えていくのか、研究者の受入に向けて何をしていくべきか、参加者と一緒に考える機会としている。これまで、盛岡の町内会での開催を皮切りとして、花巻農業高校や一関市議会でも実施している。平成29年5月には久慈市役所で開催するなど、オール岩手で開催し、I L Cと地域とのかかわり、国際化などについて理解を深めていく。

2. 外国人研究者等との意見交換

平成29年5月12日、海外研究者と直接意見交換を行う招へい事業の一環で、I L Cの技術開発等を進めるドイツのDESY（ドイツ電子シンクロトロン）研究者に本県へお越しいただいた。今年度の新たな試みで、地元の受入環境整備へ向け、外国人研究者から具体的なアドバイスをいただき、顔の見える関係の構築など、海外とのネットワーク形成につなげるものがある。

視察では、岩手県工業技術センターやいわて



DESY研究者が岩手県工業技術センターを視察（平成29年5月）

産業振興センターなど、本県の産業支援の体制、加速器に関連する地元企業も視察いただき、「高い技術ポテンシャルを持っている」との高い評価をいただいた。地元自治体との意見交換では、研究者から、「キャンパス周辺にはシャトルバスやカーシェアリングなど多様な交通の確保が必要」、「医療では、英語の通じる環境が必要」、「日本の場合には「漢字」が高いハードルになり、個別の支援が必要」、「海外に向け、もっと地元の活動を知っていただく情報発信が必要」など、

具体的なアドバイスをいただき、大変有意義であった。

今後、これらの意見を踏まえ、地元が一体となって受入環境の整備を進めることが重要であり、引き続き海外の研究者や技術者等とのネットワークを広げ、国際化対応など受入環境整備に向けた意見交換や海外への情報発信を積極的に進めていきたい。

3. 市の取組

日本は先進国であり、実生活は様々な面で便利である。行政サービスも充実しており、安心して生活できるが、外国人が移住する際に、大きな2つの壁に直面する。それは、「日本語能力の不足」と「日本制度の知識不足」である。

県内では、県、市町村、国際交流団体などが主催し、外国人が安心して暮らせるよう、外国人住民との意見交換会やアンケートなどを行っている。

よくある課題としては、「言葉の壁で医療サービスを受けるのが困難」、「過去に健康に被害を与えるトラブルがあった」、「子供の入学手続きが分からない」、「漢字が読めないため学校からのお知らせが読めない」、「税金、バスの時刻表」と乗り方、ゴミの分別と出し方など、生活に必



世界の研究所広報担当者とILCサポート委員会との意見交換会(平成27年4月)

要な情報を母国語で得られない」、「ホテルの案内用紙、レストランのメニューがすべて日本語で読めない場合もある」などがある。

ILCを契機として、これらの課題を解決し、外国人に対応した医療サービスの提供、育児・教育、生活情報の多言語化、日常生活の支援、宿泊施設・飲食店の多言語表記、外国語対応などが必要である。

児童・生徒への啓蒙活動

地域の機運醸成を図るためには、将来の地域の担い手となる若い世代を対象としたILCの啓蒙活動・多文化への理解促進も重要である。市町村では、小中高生を対象にした出前授業や英語キャンプ、最先端科学体験研修を実施している。

奥州市では、平成26年度から毎年市内中学校全校(10校)の2年生を対象とし、ILC出前授業を実施しており、平成29年度も合計1021人の生徒が受講、平成27年度から希望する市内小学校5、6年生を対象とし市職員が自前で行うILC出前授業を開始し、これまで1097人の小学生が受講している。

一関市では、平成26年度から研究者と気軽なカフェスタイルで語り合うサイエンスカフェを毎年実施しているほか、昨年度から市内中学校全校(16校)を対象にILC特別授業を実施し、計1303人が受講した。今年度も中学校の特別授業を継続して実施するほか、サイエンスキッズという小学生以下を対象としたイベントも実施し、市民へ広く普及啓発を行っている。

生活面での利便性向上

奥州市では、生活面において、在住外国人が必要とする生活情報の提供・充実を図っている。ゴミのカレンダー、避難所・避難場所の位置など具体的な生活情報を発信する英語での「Oshu City Living Guide」を設置し、随時更新している。平成27年9月から毎月、奥州市広報誌に掲載される生活情報を中心にまとめた多言語情報紙を発行している。また、一関市では、一関での生活のためのゴミ収集カレンダー等お役立ち



奥州市・一関市の生活情報（英語版ホームページ）

ガイド「Ichinoseki City English Guide」を市公式HPに掲載しているほか、ILCに関する国内外の動きや情報を伝えるILCニュースを年4回発行し、市内全世帯へ配布している。

奥州市国際交流協会では、ILC研究者も含め、外国人の市民が安心して医療を受けられるよう、平成26年度から医療通訳派遣システムを運用しており、奥州市がこの活動を補助している。水沢病院、胆沢病院に研修を受けた登録通訳者を派遣する制度で、平成28年度に33名（英語19名・中国語10名・韓国語2名・タガログ語2名）のボランティア通訳者が14件派遣された。

岩手県国際交流協会では、多言語サポーター制度を設置し、英語・中国語・韓国語・フィリピン語が話せる人材に通訳育成研修を実施しながら災害時の対応や医療通訳の研修を行っている。

外国人住民の生活上の利便性向上、外国人観光客誘致の促進という観点からも、基盤となる交通サービスの多言語表記は重要な課題である。奥州市では、平成27年度から「多言語表記促進事業補助金」の事業を開始し、観光、宿泊施設、飲食施設、公共交通などを対象とし、メニュー、パンフレット、ホームページの翻訳や

施設内外の多言語表記に補助金を交付している。

まとめ

ILCの実現により、世界の研究者が集い、この地に国際研究拠点が生ずる。外国人研究者と地域の方々が共生していくためには、地域を挙げて国際化などの取組を進めていく必要がある。また、外国人研究者とその家族が文化や言語の違いを乗り越え、地域と交流していくためには、相互の理解や受入準備が必要である。

私たちは、多文化共生や国際化の取組などに参画し、世界の研究者を笑顔で迎えられよう努力したい。私たちも、地域に温かく迎えていただいたように「岩手ならではの温かいおもてなし」を世界の研究者へ見せていきたい。